

季 刊

北海学園大学 経済論集

第49巻 第1号
(通巻第146号)
2001年6月

<論 説>

- ノモンハン事件と軍戦備
—— 草葉日記を中心にして ——
…………大 場 四千男………… 1
- 中国西部大開発における新疆の役割と直面する諸課題
…………河西 勝、馬 新 智、
カマリディン、アブドサラム………… 37
- 銀行再編と公的資金（上）
—— 大恐慌期の米商業銀行再編(3) ——
…………小 林 真 之………… 45
- 組織における情報コミュニケーション・オーディットと
ネットワークのグラフ理論的考察
…………福 永 厚………… 67
- 産地競馬としての「ホッカイドウ競馬」
…………古 林 英 一………… 79
- ドイツにおける総原価法について
…………今 村 聡………… 93
- 提示事例の特質が商品の価格規定因に対する学習者の判断に
及ぼす影響について
…………佐 藤 淳………… 103
- 情報社会と倫理
…………柘 植 尚 則………… 119
- 中国遼寧省における合資企業の現状と発展条件
…………孔 麗………… 129

<書 評>

- 香川正俊著『第3セクター鉄道』 ……小 坂 直 人………… 151

<特別寄稿>

- 現代日本の福祉・生活・経済
—— 社会福祉と経済学 ——
…………一番ヶ瀬 康子………… 155

北海学園大学経済学会

《論説》

産地競馬としての「ホッカイドウ競馬」

古 林 英 一

目 次

- 1 はじめに
- 2 競走馬の流通と産地競馬
- 3 産地競馬機能の形成過程
- 4 産地競馬機能の現状
- 5 結語

1 はじめに

競馬をはじめとする公営競技が経済研究の対象とされることは極めて稀である。公営競技全般を論じたものとしては、佐々木晃彦『公営競技の経済学』¹⁾がおそらく唯一のものであろうと思われる。同書は文化経済学の立場から公営競技（競輪・競馬・競艇・オートレース）を論じたものであり、それ自体は極めて興味深い研究であるが、産業的視点から公営競技をとらえたものではない。

俗に「3競オート」²⁾とよばれる公営競技のなかにあつて、競馬だけは欧米から持ち込まれた競技であり、さらに第2次大戦以前から施行されているのも競馬だけである。わが国では馬産振興という明白な社会的目的をもって施行されてきたという歴史がある。歴史的にみると、第2次大戦以前においては、馬券の発売による収益の確保は副次的なものであり、戦略物資でもある馬の生産振興をはかる手段としての競馬という位置づけがなされていた。他の公営競技はいずれも第2次大戦以降地方自治体の収益確保を目的として施

行されたものである。

いうまでもないことであるが、競馬は馬を使う競技であり、大規模に施行するためには数多くの馬を使用せねばならない。国際的にみると、香港、マカオ、シンガポール、フィリピンなどの東南アジア諸国において開催されている競馬のように、ヨーロッパ、北アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドなどで生産されるサラブレッド種（以下、サラとよぶ）を輸入して成立している（韓国も基本的には輸入馬中心だがごく一部で生産もおこなわれている）ケースも多々あるが、わが国では第二次大戦前に馬産が確立しており、第二次大戦以降はこれをベースにした内国産馬を中心とした競馬がおこなわれてきている。

周知のように、北海道、とりわけ日高地方においては、競馬を前提とする馬産は重要な地域産業として確立している。地域産業としての馬産の重要性に注目し、日高の軽種馬生産の構造を多面的に分析したのが岩崎徹の一連の研究³⁾である。さらに、岩崎は競馬そのものについても積極的な論考を発表していることでも知られている。また、小山良太は、岩崎の一連の研究を基礎として、日高における軽種馬生産を成立せしめている諸々の経済主体の機能に関する実証的分析を次々と発表⁴⁾している。

岩崎・小山らの研究は、基本的には軽種馬生産を研究の対象とするものであり、軽種馬の流通・消費に関しては必ずしも十分な分析

はなされていないように思われる。本稿の基本的な問題意識の一つは軽種馬の流通・消費の分析を豊富化し、わが国の馬産の構造的把握の一端を担うことにある。

岩崎らが中心になって編まれた中央畜産会編『新たな時代の軽種馬生産』（日本中央競馬会、1999年12月）は、わが国の軽種馬の生産と流通の現段階を実証的に分析した基本文献の一つである。同書では産地における競走馬の流通・市場機構の特質、および近年における市場機構再編の動きがとりあげられている（岩崎徹・古林英一「軽種馬の流通」）が、その分析の範囲は産地での動きに限定されており（同書の性格上当然のことではあるが）、軽種馬の流通総体を把握するものとはなっていない。

本稿は、(1)分析の視野を馬産地から競馬にまで広げることで、競走馬の流通構造の特質を整理し、(2)(1)を踏まえて北海道営競馬（以下、ホッカイドウ競馬）がわが国の競走馬流通のなかで果たしている社会的機能（これを本稿では産地競馬機能と位置づける）の形成とその実態を明らかにすることを目的としている。

2 競走馬の流通と産地競馬

およそ一つの産業の構造を分析するにあたっては、そこで生産される商品の生産・流通・消費という一連の過程とその特質が把握されねばならないことはいうまでもない。その際、当該商品の特性は重要な分析対象である。それは商品の特性がその生産構造を規定する重要なファクターとなるからである。

「馬は経済動物に過ぎない」といわれることがある。これは、競走馬のもつロマンや美しさを強調する言説に対する反語として使用されるケースが多いが、馬が商品として市場で取り引きされる対象となっている以上、厳然たる事実として受け止めざるを得ないであ

ろう。馬を「商品」として見た場合、そこには一般的な消費財や生産財とは異なった極めて特異な特質があることがわかる。

現在のわが国における軽種馬生産は競走馬生産と事実上ほぼ同義である。競走馬は競馬場で使用される財であるから、競馬は軽種馬の消費の場であるといえる。だが、競馬は馬そのものを「消費」する場ではない。もちろん、競走中の不慮の事故などでへい死を余儀なくされる馬も少なくはないし、競走能力が低下し、賞金稼得能力がなくなったために廃用となる馬も多い。とはいえ、多くの場合、競走馬は生きたまま競馬場を離れるのであって、競馬場で「消費」されてしまう訳ではない。同じ家畜であっても、肉牛や豚などの肉畜とは異なる。競馬で利用されるのは競走馬の持つ競走能力という用役（サービス）である。そこから生み出される用役を利用するという意味でいえば、競走馬は資本財であるというほうが妥当かもしれない。

ここで重要なことは「生きたまま」競馬場を離れるという事実である。牝馬の相当数とごく限られた牡馬は、競走馬として使用された後、産地に還元され繁殖馬として再使用される。また、他の競馬場でもう一度競走に供用されるケースも多々ある。さらに、馬術競技などで用いられる乗馬に転用されるケースもある。廃用になってと畜されるケースもあるようだ。いずれにせよ、競馬ないしは競馬場は、馬という商品にとっては最終消費の場ではなく、流過程の一部なのである。

生産された自動車が新車市場で取り引きされ、その後中古車市場で取り引きされ、最後にスクラップとなるという過程に似たものがあるが、決定的に違うのは、競馬という仕組みは、単に競馬というレジャーを提供するだけの場ではなく、馬の選別・淘汰を目的とする仕組みである点である。つまり、そこでセレクトされた馬を生産の場に環流させることが競馬の主たる目的となっていることである。

極めて優れた競走能力を発揮した馬は、競走能力が低下するまで競走に供用されることはない。数年前、40数億円という高値でわが国に輸入されたラムタラという馬がいる。この馬はヨーロッパでわずか4戦しただけである。4戦無敗のまま日本に輸入され、種牡馬として供用されている。これはかなり極端な例ではあるが、馬の選別・淘汰(=能力検定)が競馬の重要な機能なのである。

繁殖馬として供用する馬の発見は競馬の持つ一般的な機能であるが、それとは別に、わが国の場合は競走能力そのものに応じて、全国に馬を分散させるという意味での選別・淘汰のメカニズムが存在している。この点については、わが国における競馬施行の基本的な仕組みを理解しておく必要がある。

わが国で施行される競馬には中央競馬と地方競馬の2種類が存在する。2つの違いは施行者の違いである。前者は、特殊法人である日本中央競馬会(JRA)が施行し、後者は地方自治体ないしは複数の地方自治体で構成される事務組合が施行するものである。中央競馬は、一元化された賞金体系をもち、騎手免許、調教師免許、そして馬主資格などを一元的に管理している。ところが、地方競馬の施行者は様々であり、賞金体系も基本的には施行者ごとに定められている。ただし、調教師免許・騎手免許・馬主資格などについては地方競馬全国協会(地全協)が一元管理している。

いうまでもなく、競走馬は競走成績に応じて給付される賞金を目指して出走する。ところが、賞金体系、もっと端的に言えば賞金額の水準に大きな格差があれば、賞金額の水準の高いところに強い馬は集まることとなる。現在、賞金の水準は中央競馬の方が地方競馬よりも高くなっている。また、同じ地方競馬であっても、南関東(東京=大井、神奈川=川崎、千葉=船橋、埼玉=浦和)は他の地方競馬よりも賞金水準が高くなっている。

賞金レベルは売上高に規定されているから、集客能力の高い(すなわちそれだけ需要の大きい)競馬場が相対的に高くなるのは当然のことである。

したがって、競走馬は能力(厳密に言えば賞金の稼得可能性)に応じて分散することになる。例えば、競走能力の限界から、中央競馬でこれ以上の賞金を稼得することができなくとも、相対的にレベルの低いどこかの地方競馬であれば、まだ賞金を稼得することができるかもしれない。こういう場合は、中央競馬からどこかの地方競馬へ移籍することになる。また、逆に、たまたま賞金額の低い地方競馬で出走したところ、極めて高い競走能力が発揮されたために、中央競馬やもっと賞金レベルの高い他の地方競馬に移籍するということも珍しくない。

つまり、競馬が能力検定の場合であるということによって、それぞれの競馬場が競走馬の流通を媒介する、換言すれば競馬場は一種の流通機構としての役割を果たすことになっているのである。競馬ないしは競馬場は、競走馬の「消費」の場であると同時に、流通機構としても機能しているのである。

現在、北海道では北海道市営競馬組合、北海道、およびJRAの3つの競馬施行主体があり、道内7カ所の競馬場でそれぞれ競馬を開催している。

北海道市営競馬組合が施行しているのは重種馬を使ったばん曳競走で、これは北見、帯広、旭川、岩見沢の4競馬場を使っておこなわれている。中央・地方の区分でいえば地方競馬に分類されるが、使用されている馬が重種馬であり、今日では他にみられない形態(世界でも例をみないといわれている)の競走であることから、先に述べた競走馬の流通機構としての役割は全く持っておらず、使用される馬の生産・流通・消費の諸過程で他の競馬と重複する部分は殆どない。したがって、本稿では、ばん曳競走を除外して考察をおこ

なっている。

北海道が施行しているのが道営競馬（ホッカイドウ競馬）である。これは、今日では、札幌、旭川、門別の3カ所で開催されている。数年前までは帯広、岩見沢でも開催されていたが、現在では上記3カ所のみで開催となっている。ちなみに、札幌開催はJRAの施設である札幌競馬場を借りての開催である。

札幌競馬場と函館競馬場はJRAの施設であり、毎年夏に中央競馬が函館・札幌各2開催ずつの計4開催（32日間）おこなわれている。ちなみに、中央競馬の1開催は8日間、地方競馬を含む他の公営競技では原則として1開催は6日間である。

3 産地競馬機能の形成過程

ホッカイドウ競馬は、近年、売上の不振による赤字が続いていることから、その存廃問題が論議されるようになってきていることは周知であろう。存廃問題に関する一応の結論（あくまでも「一応」であり、その最終的な決着がついた訳ではない）を出すにあたって、最も重要な役割を果たしたと考えられる「北海道地方競馬運営委員会答申」（岩崎徹委員長、1999年11月発表）は、ホッカイドウ競馬の社会的役割や存在意義として、(1)日本の馬産や競馬に関しての北海道の役割、(2)北海道の経済や農業に果たす役割、(3)健全な娯楽の提供、および(4)馬文化の創造、農村景観としての役割の4点を揚げ、「財政問題だけで北海道競馬の存廃は語れない」と述べている。

上記答申のなかで本稿との関わりで特に重要な部分は(1)の部分である。馬産は北海道、とりわけ日高・胆振地方の重要な地場産業であり、単に牧場やそこで働く人々の所得・雇用の確保だけではなく、周辺の関連諸産業の成立をも考慮すると大きな経済波及効果をもっている。だが、馬産の存立基盤は現在では競馬以外にはなく、その意味では限られた

マーケットに全面的に依拠したものとなっている。一方、競馬という巨大娯楽産業の側からみると、競走馬資源の確保は競馬施行の最も重要な要件の一つであり、北海道の馬産なくしては成立しないという側面がある。つまり、競馬と馬産は不即不離の関係にある。

競馬と馬産が不即不離の関係にあるからといって、ホッカイドウ競馬存続の根拠とするわけにはいかないだろう。競馬はホッカイドウ競馬だけではない。答申でいう「日本の馬産や競馬に関しての北海道の役割」とホッカイドウ競馬の関わりが検証されねばならないだろう。

ここでホッカイドウ競馬に固有なキー概念として「産地競馬」という概念が浮かび上がる。これまでもホッカイドウ競馬の存続を訴える側からは「産地競馬を守れ」というスローガンが掲げられてきた。では「産地競馬」とは一体いかなるものであろうか？単に馬産地で施行される競馬であるというだけの意味であるならば、ホッカイドウ競馬存続への有力な根拠とはなり得ないだろう。馬産地で施行されるが故にわが国の競馬システムにおいて、重要かつ不可欠な役割を果たしているということが実証されねば意味はあまりないといわざるを得ない。

既に述べたように、競馬ないしは競馬場は競走馬の流通機構としての役割をもっている。「産地競馬」という概念は、おそらく、こうした側面から規定されるべきではないかと思われる。そこで、本稿では、わが国の競馬システムにおいて、馬産地に近いが故に、産地市場的流通機能を担っている競馬こそが産地競馬であると規定する。すなわち、馬産地で生産された軽種馬が、競走馬として競馬システムのなかを流通していく出発点として、商品たる競走馬の評価・分散の機能を担っているのが産地競馬であるとする。

馬産地で競馬がおこなわれるということは一見ごく自然なことのようと思われるが、馬

産がおこなわれている地域の人口規模を考えると、今日的な競馬が興行的に成立しうる余地はあまりないということに気づく。今日のわが国のように、競馬が娯楽としてのみ成り立っている場合、このことはさらに明らかであろう。つまり、ある程度以上の馬券の売上がなければ、競馬施行にともなう各種の費用はまかなえない。競馬施行にともなう費用のなかで最も重要なものは賞金と出走手当である。馬主が得る賞金や出走手当が十分大きくなければ馬主は馬を維持し得ない。いくら趣味で競走馬を持っているとしても、ある程度の稼得が期待できなければ競走馬を保有し続けることは困難である。

馬主が稼得する賞金・出走手当は馬券の売上から支払われる。したがって、馬券の売上高が少なれば馬主に配分される賞金・出走手当は少なくなり、その結果、十分な競走馬資源が確保できず競馬を開催することは不可能となる。つまり、そもそも、人口の希薄な地帯での競馬事業の収益性は低いのである。先に、地方競馬のなかでも、いわゆる南関4場(大井、川崎、船橋、浦和)の賞金水準が相対的にみて高いと述べたが、このことはここに起因しているのである。

『ホッカイドウ競馬四〇年史 北の蹄音』には、ホッカイドウ競馬創成期の数々のエピソードが記されている。なかでも、1970年代前半までの競走馬資源の不足とその対応については興味深いものがある。軽種馬が不足し、やむなく中間種のアングロ・ノルマン(当時の出走表にはアノと記載されている)の競走を組んだり、さらには北海道和種(通称、ドサンコ)の競走さえおこなわれたという⁵⁾。

アングロ・ノルマンやドサンコのレースが開催されたことは、馬産地ならでのことともいえなくもないが、このような競馬が現代における競馬ではないことはいうまでもないだろう。

同様の状況は、北海道に次ぐ馬産地であった南九州においてもみられた。第二次大戦前は宮崎競馬場で帝国競馬協会による公認競馬(戦後の中央競馬に相当する)が開催されていたが、第二次大戦中に休止となり、第二次大戦後中央競馬はついに開催されることはなかった。だが、1947年から1963年まで、宮崎競馬場では宮崎県営・延岡市営の地方競馬が開催されていたし、同じ宮崎県内で都城市営競馬が都城市郡元競馬場で開催(1963年まで)され、鹿児島県でも鹿屋市において鹿屋市営競馬が1962年までおこなわれていた。廃止の原因はいずれも競走馬資源の不足であった⁶⁾。

上記『北の蹄音』は、競走馬資源の確保のためにおこなわれてきたホッカイドウ競馬における抽選馬制度が1972年に終わったことを受け、「時代はようやく、馬資源を持てあますほどの余力を蓄えてきた」と述べている⁷⁾が、この時期、ホッカイドウ競馬の登録頭数は急速に増大している。

図表1は1960年代終わり頃から1970年代初頭にかけてのホッカイドウ競馬の登録頭数である。サラ系の頭数そのものが少ないこともあるが、その年齢別構成において、2歳馬のしめる比率が20~25%程度にとどまっているということである。つまり、古馬になってホッカイドウ競馬に転入してくる馬を中心として競馬がおこなわれているということである。上述のように、本稿では新馬の評価・分散機能を担うのが産地競馬であると規定した。この規定によれば、古馬中心のレースが組まれているということは、産地競馬としての機能を果たしていないということに他ならない。

さらに、この表を注意深くみると、特にサラの場合、2歳馬と翌年の3歳馬の数にそう大きな差がないことがわかる。それどころか、1971年、1972年になると、逆に3歳になってからの方が数が増えている。もちろん、転

図表1 年度別・品種別ホッカイドウ競馬登録頭数

品種	年度	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	計	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	計
		頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭		%	%	%	%	%	%	%	%	
サラ系	1967	29	32	22	23	10	11	6	3	136	21.3	23.5	16.2	16.9	7.4	8.1	4.4	2.2	100.0
	1968	20	17	19	14	11	8	5	3	97	20.6	17.5	19.6	14.4	11.3	8.2	5.2	3.1	100.0
	1969	25	19	23	18	17	14	3	1	120	20.8	15.8	19.2	15.0	14.2	11.7	2.5	0.8	100.0
	1970	30	23	22	17	16	7	5	1	121	24.8	19.0	18.2	14.0	13.2	5.8	4.1	0.8	100.0
	1971	40	47	35	17	17	9	5	1	171	23.4	27.5	20.5	9.9	9.9	5.3	2.9	0.6	100.0
	1972	93	64	59	22	19	4	—	—	261	35.6	24.5	22.6	8.4	7.3	1.5	—	—	100.0
アラ系	1967	138	70	45	23	35	23	6	3	343	40.2	20.4	13.1	6.7	10.2	6.7	1.7	0.9	100.0
	1968	150	92	41	23	16	17	7	3	349	43.0	26.4	11.7	6.6	4.6	4.9	2.0	0.9	100.0
	1969	174	134	75	28	14	16	6	1	448	38.8	29.9	16.7	6.3	3.1	3.6	1.3	0.2	100.0
	1970	192	128	90	60	26	6	6	2	510	37.6	25.1	17.6	11.8	5.1	1.2	1.2	0.4	100.0
	1971	180	157	80	58	31	9	2	1	518	34.7	30.3	15.4	11.2	6.0	1.7	0.4	0.2	100.0
	1972	204	124	72	53	31	9	—	—	493	41.4	25.2	14.6	10.8	6.3	1.8	—	—	100.0
速歩	1967	38	18	7	5	3	2	7	3	83	45.8	21.7	8.4	6.0	3.6	2.4	8.4	3.6	100.0
	1968	25	14	5	2	3	3	3	3	58	43.1	24.1	8.6	3.4	5.2	5.2	5.2	5.2	100.0
	1969	2	12	4	4	1	2	2	1	28	7.1	42.9	14.3	14.3	3.6	7.1	7.1	3.6	100.0
	1970	—	1	8	3	1	1	2	2	18	—	5.6	44.4	16.7	5.6	5.6	11.1	11.1	100.0
	1971	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	1972	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	1967	205	120	74	51	48	36	19	9	562	36.5	21.4	13.2	9.1	8.5	6.4	3.4	1.6	100.0
	1968	195	123	65	39	30	28	15	9	504	38.7	24.4	12.9	7.7	6.0	5.6	3.0	1.8	100.0
	1969	201	165	102	50	32	32	11	3	596	33.7	27.7	17.1	8.4	5.4	5.4	1.8	0.5	100.0
	1970	222	152	120	80	43	14	13	5	649	34.2	23.4	18.5	12.3	6.6	2.2	2.0	0.8	100.0
	1971	220	204	115	75	48	18	7	2	689	31.9	29.6	16.7	10.9	7.0	2.6	1.0	0.3	100.0
	1972	297	188	131	75	50	13	—	—	754	39.4	24.9	17.4	9.9	6.6	1.7	—	—	100.0

注：年齢表記は新表記法（誕生翌年1月で1歳）

1971年以降、速歩競走は廃止

資料：『競馬成績書』各年。

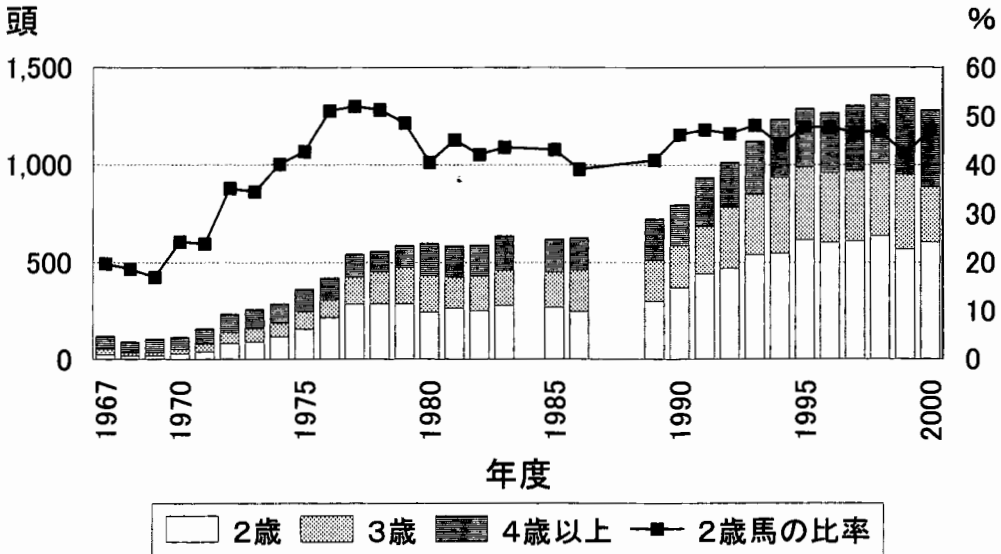
入と転出の両方が存在するから一概にはいえないものの、少なくとも、ホッカイドウ競馬で新馬としてデビューし他場へ転出する馬よりも、他場でデビューしてホッカイドウ競馬に転入する馬の方が多ということである。

ただし、アラ系に関しては、ホッカイドウ競馬でデビューした後に、他場へ転出するケースはかなりみられる。たとえば1967年には138頭の2歳馬が登録されているが、翌68年の3歳馬は92頭しかいない。すなわち転出が転入を大幅に上回っているのである。他の年もほぼ同様である。したがって、アラ系においては、既にこの段階において、新馬の評価・分散を行う産地競馬機能が備わっていたといえよう。

では、サラにおけるホッカイドウ競馬の産地競馬機能の形成は、どの時期に求めることができるのであろうか。この点について検討してみよう。

図表2はホッカイドウ競馬のサラ出走頭数を年齢階層（2歳、3歳、4歳以上）にわけその推移をみたものである。1972年頃から出走頭数全体が急速に増大していくが、これは2歳馬の頭数が増大していることによる部分が大きいことがわかる。このことによつて、1970年代初頭までは20～30%であった2歳馬の比率が1976年頃には50%を超えるまでになり、1977年には52.0%を2歳馬がしめるまでになっている。その後、2歳馬の比率はやや低下するものの、登録頭数そのも

図表2 サラ系年齢別出走頭数



注：1984, 1987, 1988 年度不明

資料：競馬成績

のは600頭前後で推移している。したがって、サラにおける2歳馬中心の競馬という現行の競馬施行形態が確立するのは1977年頃以降であるといえよう。

ホッカイドウ競馬の産地競馬化を論じるもう一つの論点をここで提示しよう。それは、ホッカイドウ競馬内部の問題ではなく、わが国における軽種馬生産全体におけるホッカイドウ競馬の位置づけについてである。

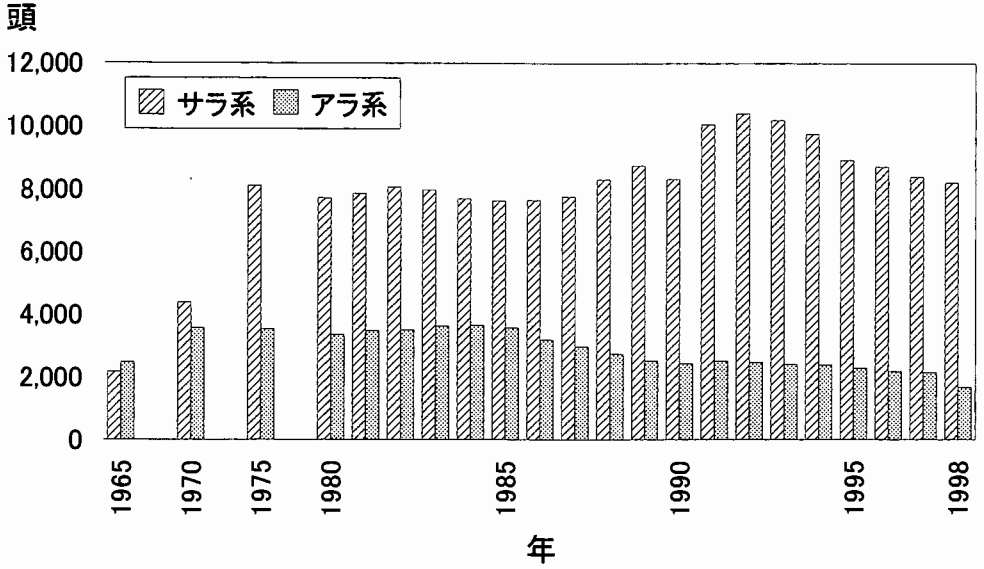
そのためには、まず、この1970年代中期以降という時期が、わが国の軽種馬生産にとってどのような時期であったかをみておく必要がある。図表3はわが国の軽種馬生産の推移である。1960年代後半にはサラがアラを上回り、さらに1970年代中期以降になると、アラの生産頭数はなだらかに減少にむかう。サラのほうはその後もしばらくは生産増が続くものの、1970年代後半になると生産は停滞傾向に転じている。いわゆる「生産過剰」が議論されるようになったのがこの時期である。1975年産馬が2歳馬として競馬場

に登録されるのが1977年であるから、ホッカイドウ競馬へのサラの登録頭数が1977年以降停滞傾向に転じているのも、こうした生産動向を反映したものに他ならない。

わが国で生産されるサラのうち、ホッカイドウ競馬に登録される比率の推移を見たのが図表4である。

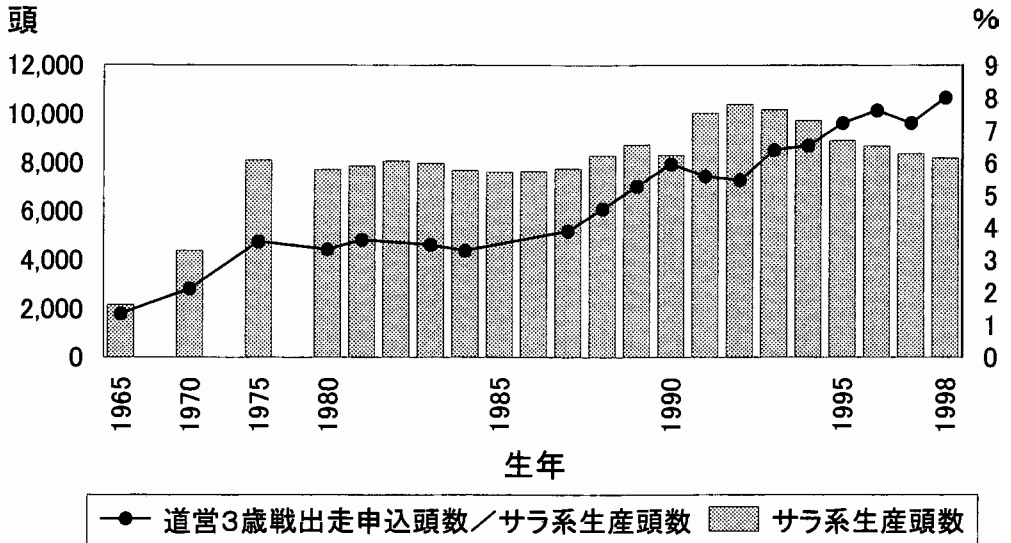
1965年に生まれたサラは全国で2,165頭であった。1965年産馬が競走に使われるのは2歳になる1967年からである。1967年、ホッカイドウ競馬に登録されたサラ2歳馬は29頭にすぎない。つまり、全国で生産されるサラでホッカイドウ競馬でデビューしたのはわずか1.34%に過ぎないということである。その後、サラの生産頭数が増えるにしたがい、ホッカイドウ競馬の2歳に登録する馬も増えている。1975年産サラについていうと、生産頭数が8,113頭と、10年間で3.7倍に増えている。これに対し、1977年にホッカイドウ競馬に登録した2歳馬は290頭で10年間にちょうど10倍となっており、生

図表3 わが国における軽種馬生産頭数の推移



資料：軽種馬生産統計

図表4 生産頭数とホッカイドウ競馬2歳出走率



資料：軽種馬生産統計，競馬成績書

産頭数の伸び率を大きく上回っている。その結果、ホッカイドウ競馬でデビューするサラの比率は3.57%にまで達した。先にみたように、この時期には2歳馬中心というホッカイドウ競馬の特徴があらわれてはいるものの、サラの生産頭数からいえばその比率はわずか、3~4%程度にとどまっており、わが国のサラの生産全体からみると、そう大きな位置づけがなされていたわけではないといえる。こうした状況は1980年代半ばまで続く。

1980年代中期以降になると、いわゆる競馬ブームと景気の拡大という2つの要素があいまってサラの市場は再度拡大基調に転じる。この時期には興味深い現象がみられる。生産頭数の増大とホッカイドウ競馬での2歳馬登録の比率がともに上昇をみせるのである。1987年産サラは全国で7,765頭、1989年にホッカイドウ競馬に登録された2歳馬は303頭(生産頭数の3.90%)であったのが、生産頭数がピークに達した1992年産馬10,407頭の5.47%にあたる569頭が2歳馬としてホッカイドウ競馬に登録されるまでになっている。

その後、生産頭数そのものは減少に転じているにも関わらず、ホッカイドウ競馬に登録される2歳馬は650~670頭の水準で推移している。その結果、全国で生産されるサラにしめるホッカイドウ競馬2歳登録頭数の比率は年々増加し、1998年産馬ではついに8.01%にまで達している。

こうした推移の背景には、1996年度からJRA認定競走が実施されたことも見逃せない。これは、JRAが認定した2歳戦で勝った馬は地方競馬に在籍したまま、中央競馬の特定の競走(特別指定交流競走)に出走できるという制度である。賞金額の高い中央競馬に出走しやすくなるということで、地方競馬の馬主にとっては大きなメリットがある。さらに、市場取引馬がこの競走に勝つと市場取引奨励賞が馬主に交付されるというメリット

もある。

とはいえ、ホッカイドウ競馬でデビューする馬の比率の上昇傾向は1980年代後半からのものであり、認定競走制度がこの比率を上昇させるのに寄与していることは確かであろうが、これだけがホッカイドウ競馬に登録する2歳馬の比率を引き上げているわけではないと思われる。

以上、要約すると、2歳馬中心というホッカイドウ競馬の番組構造は既に1970年代には確立していたが、全国レベルで見た生産頭数との比率でいえば、まだそう大きなものとはなりえていなかった。それが、1980年代後半以降、2歳馬にしめるホッカイドウ競馬の位置づけは相対的に高まり、今日では無視できないレベルに達している。つまり、1970年代後半には産地競馬化の形成がおこなわれ、1980年代後半以降、産地競馬としての役割が年々強くなってきているということではないだろうか。

4 産地競馬機能の現状

前節ではホッカイドウ競馬の産地競馬化が1970年代に始まり、1980年代後半以降、その機能を高めつつあるという結論を導いた。このことをふまえて、本節では競走馬の評価・分散という産地競馬機能の現状を具体的に検討する。

これまでの分析においては、馬の年齢構成など、いわば商品構成の特徴を指標としてとりあげたが、当然のことながら、市場・流通を論じるためには商品を媒介として取り結ばれる経済主体の分析は不可欠である。競走馬という商品の流通機構として、競馬(場)を位置づけるためには、商品たる競走馬の所有者である馬主の属性をみておく必要がある。

競走馬の生産者を大別すると、生産した馬を販売することを主たる目的とするマーケット・ブリーダーと、生産した馬を競走に出走

させることを主たる目的としているオーナー・ブリーダーに区分される。わが国の軽種馬生産は主としてマーケット・ブリーダーによって担われている。つまり、生産者の多くは自己の生産した馬が販売されなければビジネスにはならないのである。

ホッカイドウ競馬の馬主の構成にはきわめて特徴的な点がみられる。ホッカイドウ競馬の馬主の多くは北海道馬主会に属している⁸⁾。図表5は北海道馬主会の会員をその職業別に見たものである。会員数の過半数を牧畜業(その殆どすべては競走馬を生産する牧場経営者であろう)で占められている。他の地方競馬や中央競馬の馬主構成にはみられない、ホッカイドウ競馬の特徴である。このことをもってしても、ホッカイドウ競馬が産地競馬として機能していることがうかがわれる。

さらに興味深いことに、馬主の職業構成がこの10年ほどの間に大きく変化している。図表6は牧畜業を営む馬主とその他の馬主の構成比の変化を示したものである。1991年から1999年の間に、北海道馬主会の会員(ほぼ馬主の数とみてよい)は627名から

図表5 北海道馬主会の職業別会員数
(1999.3.16現在)

職 業	人 数	構成比率
牧 畜 業	368	54.4
商 業	91	13.4
工 業	10	1.5
建 設 業	55	8.1
会社・団体等役職員	19	2.8
医 師 等	18	2.7
飲 食 業	17	2.5
遊 技 場	15	2.2
サ ー ビ ス 業	10	1.5
不 動 産 業	26	3.8
運 輸 業	7	1.0
自動車整備・販売業	9	1.3
そ の 他	19	2.8
無 職	13	1.9
計	677	100.0

資料：北海道馬主会

図表6 馬主会員にしめる牧場主の比率

職業	1991年度		1999年度	
	人	人	%	%
牧畜業	284	368	45.3	54.4
その他	343	309	54.7	45.6
計	627	677	100.0	100.0

資料：1991年度データは社団法人北海道馬主会『20年のあゆみ1971～1991』, p.17, 1999年度は北海道馬主会資料

677名と8.0%増加しているものの、牧畜業以外の馬主は343名から9.9%減少し、その一方で、牧畜業を営む馬主は、逆に、284名から368名へと29.6%の大幅増となっているのである。

景気の低迷とともに競走馬の需要が低迷し、生産した馬が思うような価格で売れなくなった。それゆえ、生産者は自分の生産した馬をホッカイドウ競馬で使うというかたちになっているといえよう。とはいえ、ホッカイドウ競馬は1991年以降馬券の売上高を年々減少させ続けており、このことは馬主経済の根幹である出走手当や賞金面の減額にもつながってきた。非生産者馬主についていえば、馬主が競走馬を維持しえなくなったり、競走馬を所有するメリットが小さくならざるを得ない。さらに、長引く景気の低迷のもとで馬主の本業が厳しくなっていることも見逃せないだろう。

こうした状況の下で、牧場がホッカイドウ競馬に自己の生産馬を自ら使うようになってきたということは、軽種馬生産農家がオーナーブリーダー化したことを示しているのではないことは確かであろう。したがって、軽種馬生産牧場が生産馬を販売するための手段として、自らが馬主となりホッカイドウ競馬に生産馬を入厩させるようになったと考えるべきであろう。すなわち、非生産者馬主の減少と、生産者馬主の増加は表裏一体の関係をなしているのである。

さて、わが国では1990年代後半になって

軽種馬流通の多様化が著しく進展してきた⁹⁾が、そのなかで、2歳馬のトレーニングセール¹⁰⁾やさらには現役競走馬の市場も開催されるようになってきている。軽種馬取引の多様化という流れのなかで見ると、ホッカイドウ競馬がいわば新馬の見本市としての役割を果たしているとも見ることが可能である。

秋競馬が11月の道営記念(中央競馬の有馬記念競走に相当する重要レース)を最後に終わるとホッカイドウ競馬は翌年春まで休止となるが、2歳馬が大量にホッカイドウ競馬から流出するのも秋競馬の時期である。

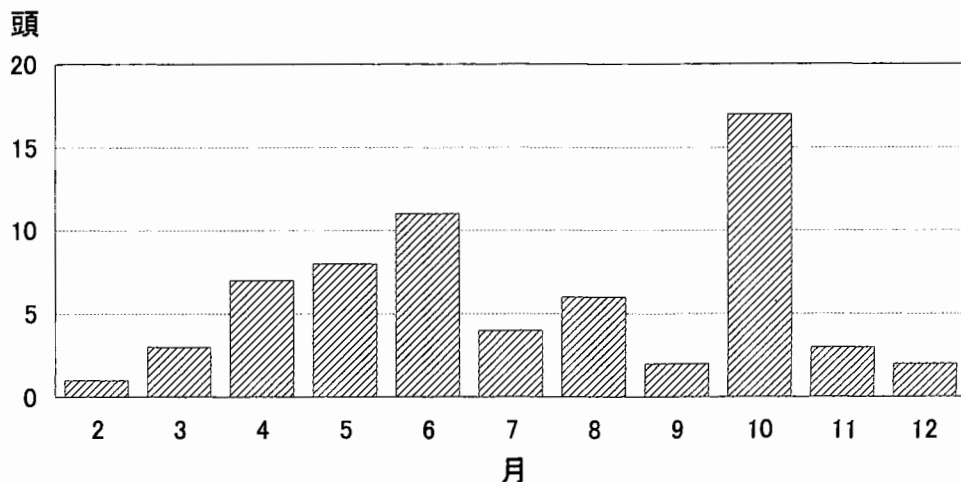
厳密に言えば、2歳馬の流出を販売によるものと断定することはできない。ホッカイドウ競馬の馬主が他の地方競馬に所有馬を移籍するということも多々あるからである。正確にこの点を明らかにするためには、流出した2歳馬のすべてを調査する必要があるのだが、こうした作業をおこなうことは事実上不可能である。そこで、ここでは、傍証として競走馬の名義変更に着目した。もちろん、名義変更があったからといって、そのことが競走馬が売れたということにはならない。個々の名義変更の内容を検討すると、親子や兄弟への

名義変更らしきものも含まれているし、そもそも名義変更=売買ではない。また、ホッカイドウ競馬から流出する馬の数と名義変更の数を比較すると、流出数が圧倒的に多い。とはいえ、名義変更数が所有権の移転をあらわしたものである以上、名義変更数の季節変動は競走馬の売買の動きを反映していることは確かであろう。

図表7はホッカイドウ競馬の2歳馬の名義変更数の月別推移をみたものである。4～6月に一つのピークがあり、夏をはさんで10月に大きなピークがみられる。

ホッカイドウ競馬では全国に先駆けて4月の開幕開催から新馬戦がおこなわれる(中央競馬は6月の函館開催からおこなわれる)。したがって、まず、この時期に勝ち上がった馬がその能力を評価されて販売される。だが、実際は、その段階で新馬がすぐに流出するわけではない。新馬戦を勝ち上がった馬は夏の中央競馬の北海道シリーズ(函館・札幌で各2開催、計32日間おこなわれる)で実施される交流競走で中央競馬の高額賞金レースに出走が可能であるため、多くがホッカイドウ競馬にとどまっていると思われる。

図表7 月別名義変更頭数(2歳馬のみ、2000年)



資料：地方競馬全国協会

そして、夏競馬をはきんで、秋になると能力の見極めがほぼ終わり、それぞれ能力（すなわち商品としての品質）に応じて全国に転出するということになるのである。図表 8 は 2000 年度のホッカイドウ競馬における転出の状況をあらわしたものである。古馬を含めると、全国のすべての競馬場に転出がみられる。また、2 歳（厳密にいうと 2001 年 1 月以降は 3 歳だが）だけに限定しても石川県（=金沢競馬）以外のすべてにわたって転出していることがわかる。

現在のところ、賞金額の水準は JRA が最も高く、次いで南関東地区（埼玉=浦和競馬、千葉=船橋競馬、東京=大井競馬、神奈川=川崎競馬）となっている。したがって、能力

上位の馬はこうした地区に転出し、逆に、能力的に劣るとと思われる馬は九州や四国に流れていくと考えてよいだろう。なお、広島（=福山競馬）に向けてのサラの移動がないのは、福山競馬ではサラの競走がおこなわれていないことによる。

直接的な資料に基づいた分析とはいえないものの、名義変更のピークが 10 月というのは決して偶然ではなく、上記の一連のタイムスケジュールに応じた現象であり、ホッカイドウ競馬が新馬の能力検定の場として、そして、流通の拠点として一種の集散機構として機能していることを示すものであろう。

5 結 語

以上の分析によって、北海道、とりわけ日高・胆振地方における重要な地域産業である軽種馬生産に対して、ホッカイドウ競馬が一種の流通拠点（本稿でいう産地競馬機能）としての役割を果たしていることが明らかになった。また、若干の歴史的分析をふまえ、産地競馬機能が形成・強化されてきたのではそう古い話ではなく、比較的近年になって産地競馬機能が強くなってきたということもあわせて示された。

このことは、ホッカイドウ競馬が単なる地方自治体の収益事業ではなく、軽種馬生産という決して無視し得ない北海道の地場産業に深くビルト・インされた存在であるということを示しているのである。少し大きさない方かもしれないが、ホッカイドウ競馬の存廃問題は、日本における軽種馬生産の根幹にかかわる問題といってもいいかもしれない。

また、単に産地における流通機構としての意味だけではない。「競走馬の産地を抱える北海道競馬が廃止された場合、競馬の文化面における意義が軽視され、経済的側面を重視して廃止を検討する主催者が多発することが懸念される」¹¹⁾ という需要面での影響も大き

図表 8 道外移動馬 (2001.3.28 まで)

移動先	サ ラ			ア ラ		
	2 歳	古馬	計	3 歳	古馬	計
J R A	33	7	40	—	—	—
岩 手	2	13	15	—	—	—
山 形	3	9	12	—	—	—
新 潟	6	3	9	—	—	—
栃 木	34	21	55	1	—	—
群 馬	16	12	28	—	—	—
埼 玉	5	3	8	—	—	—
千 葉	17	7	24	—	—	—
東 京	15	21	36	—	—	—
神 奈 川	16	7	23	—	—	—
石 川	—	6	6	—	—	—
岐 卓	19	5	24	—	1	1
愛 知	22	9	31	—	1	1
兵 庫	17	2	19	1	—	1
島 根	3	1	4	5	—	5
広 島	—	—	—	8	2	10
高 知	19	11	30	2	—	2
佐 賀	34	25	59	1	—	1
熊 本	5	3	8	—	—	—
大 分	22	14	36	5	—	5
合 計	288	179	467	23	4	27
不 明	19	※サラ・アラ含める				

注：移動時提出（調教師）の退職届けの申請を基に作成しており、牧場等を経由し他主催者へ移動した馬は対象外となっている。（年齢は、同届け提出時とする）。年齢は 2000 年の旧年齢表記。
資料：北海道競馬事務所

いだろう。ホッカイドウ競馬の廃止を契機として、全国の半数近い主催者が地方競馬の廃止をおこなった場合、産駒の販売頭数は約2,000頭減少するであろうというシミュレーション結果¹²⁾もある。このシミュレーションの妥当性に関しては議論の余地もあろうが、少なくとも、ホッカイドウ競馬の存廃問題が決して小さなものではないことだけは確かであろう。

とはいえ、厳しい自治体財政のなかで、一産業の保護のために多大な財政支出をし続けることに北海道民のコンセンサスを得ることが困難であることも確かである。軽種馬生産に関わるインフラストラクチャーとして機能を果たしているホッカイドウ競馬ではあるが、いうまでもないことだが、「興行」的収益をあげつつ、同時に地場産業である軽種馬生産の維持・発展に寄与するということが最も望ましいのである。

しかしながら、「興行」的側面からみると、ホッカイドウ競馬は産地競馬であるがゆえの不利を被らざるを得ないことも付記しておきたい。まず、新馬中心の番組編成であるために競馬ファンにとっては馬券が購入しにくいことである。過去の実績がない新馬に関しては当然のことながら過去の競走成績が十分でない。自らの推理を楽しむ競馬ファンにとってみると、このことは馬券購入の判断材料に乏しいということである¹³⁾。

さらに、ここで優れた能力を発揮した競走馬が道外に流出する（だからこそ産地競馬なのだが）ためにスターホースが育たない。また、古馬の頭数が少ないため少頭数のレースが多くなり、馬券的妙味が薄れざるを得ない。

他の公営競技からみると「不沈艦」に見えた中央競馬においても、ついにここ数年来売上金額が減少傾向に転じている。こうした状況の下、産地競馬であるがゆえの、上述のような「興行」面での不利を有するホッカイドウ競馬の収益性を向上させることはかなり困

難なことであろう。だが、ありとあらゆる手段を駆使して収益性を多少なりとも向上させる必要はあろう。

本稿はホッカイドウ競馬のもつ産業インフラ的役割の評価を明らかにしようとするものであったが、この点をさらに明確に打ち出すというのもホッカイドウ競馬存続への一つの方向ではないだろうか。先に少し述べたように、一連の市場改革や新市場の開設にみられるように、1990年代後半以降軽種馬の流通は大きく様変わりを見せている。2000年秋には現役競走馬のセールも開催された。こうした動きは庭先取引中心の閉鎖的固定的な取引形態から開放的流動的な取引形態への転換を指し示している。とすれば、ホッカイドウ競馬を産地流通機構の一端として明確に位置づけ、秋の2歳馬競走にクレーミングレース¹⁴⁾を導入するという方法も考え得るのではないだろうか。

最後に残された課題について付言しておきたい。本稿ではホッカイドウ競馬が果たしている産地競馬機能がある程度明らかにしたといえるが、軽種馬の流通構造の全体像のなかにホッカイドウ競馬を位置づけることは必ずしも十分におこなうことができなかった。この点に関しては、競走馬の流通実態（馬の移動と所有の関係、取引形態、競走馬流通における家畜商の活動など）の解明がおこなわれなくてはならないだろう。今後の課題としたい。

[付記] 本稿はホクサイテック財団助成金による共同研究「馬産業の経済波及効果と馬クラスターによる地域活性化」(代表岩崎徹)の成果の一部である。

注

- 1) 佐々木晃彦『公営競技の文化経済学』芙蓉書房出版、1999年。
- 2) 競馬、競輪、競艇、オートレースの総称。

- 3) 進藤賢一・岩崎徹「日高地方における軽種馬生産の研究(1)~(6)」札幌大学『経済と経営』, 1979, 1980, 1983, 1993, 1996年。岩崎徹・小山良太「日高地方における軽種馬経営意向調査」札幌大学『経済と経営』第31巻第1号, 2000年6月など。
- 4) 小山良太「軽種馬経営の投資構造と総合農協の指導金融事業」北海道大学農学部『農経論叢』第56集, 2000年3月。小山良太「軽種馬生産における家族経営の存立と補完団体の機能」北海道大学農学部『農経論叢』第56集, 2001年3月。
- 5) 『北の蹄音 ホッカイドウ競馬四十年史』道新スポーツ, 1989年, 69~86頁。
- 6) 山口富郎『馬と宮崎と二十世紀』鉦脈社, 1997年, 221頁など。
- 7) 前掲書, 85頁。
- 8) ホッカイドウ競馬の場合は, 馬主会に属していなくても, 地方競馬全国協会が認めた馬主資格さえあれば, 自分の所有する競走馬を出走させることができる。そのため, 北海道馬主会に所属しない馬主も若干名あるようだ。
- 9) この点については, 古林英一・岩崎徹「軽種馬の流通」中央畜産会編『新たな時代の軽種馬生産』(日本中央競馬会, 1999年)第V章を参照されたい。
- 10) 多くの馬は2歳の春以降競走馬として出走する。したがって, このセールにおいては, かなりの程度調教を積んだ馬が取り引きされる。馬主にとっては後期育成の費用を節減することができ, その間のリスクも回避できるというメリットがある。いわば即戦力となる若駒のセールである。
- 11) 『北海道競馬廃止の影響に関する調査報告書』(日高軽種馬振興対策協議会, 2000年8月) p.18。
- 12) 同上書, p.22。
- 13) ホッカイドウ競馬の馬券を購入する競馬ファンにとってはそうであっても, 全国で最も早い時期におこなわれる新馬戦は全国の競馬関係者の注目度は高い。
- 14) 出走する競走馬の販売を目的として行われる競走でアメリカ合衆国などで施行されている。